

悲しみに温かい地域社会を目指した包括的ライフエンディング・サポート活動

Comprehensive life-ending support to contribute to the community with warmth for the people having their griefs and the people thinking about their death

山下 恵子¹⁾ 目久田 純一²⁾ 赤沢 昌子³⁾
Keiko YAMASHITA Jun-ichi MEKUTA Masako AKAZAWA

飯島 恵道⁴⁾ 山口 裕貴⁵⁾
Keidou IJIMA Yuki YAMAGUCHI

1) 松本短期大学看護学科, 2) 松本短期大学幼児保育学科, 3) 松本短期大学介護福祉学科,
4) 曹洞宗薬王山東昌寺, 5) 株式会社 長野エーコープサプライ・セレモニー事業部

要旨

目的：死生における共感都市構築の観点に基づき、ライフエンディング・ステージについて包括的なサポート活動を実施し、その活動の参加者によるアンケート内容の分析から、活動の有益性を明らかにする。

方法：平成24年6月に長野県松本市において開催された「みんくるカフェ@信州まつもとー悲嘆学スペシャル」の参加者に対して記述式アンケート調査を行い、収集されたデータに対してテキストマイニングを行い、自由記述の内容の分類を行った。

結果・考察：分析から5つのクラスター「多職種からの学び」「全体的な感想」「参加の動機および今後の期待」「新たな出会いや人とのつながり」「参加した意義」が抽出された。「多職種からの学び」「新たな出会いや人とのつながり」の2つのクラスターには全部で25件の自由記述が分類され、その内の23件(92%)が「さまざまな立場(職種)の人達からの話を聴けたこと」もしくは「さまざまな立場の人達と対話できたこと」を肯定的に評価する内容だった。この結果から、包括的ライフエンディング・サポートの基本的な活動形態として、さまざまな職種の人達を話題提供者とした講演とワールドカフェの組み合わせは妥当だったと考えられた。さらに、本活動の特徴から、本活動の蓄積が死生における共感都市構築に重要な役割を果たしうることが示唆された。

【キーワード】 包括的ライフエンディング・サポート、共感都市、ワールドカフェ、グリーフケア

I. はじめに

超高齢化社会を迎えた本邦では、終活やエンディングノートなど死を肯定的に捉える話題がメディアでも多く取り上げられ、死生に対する社会的関心の変化と高まりが窺われる。このような社会的関心の高まりを背景に、近年ではライフエンディング・ステージに臨む人達のサポート体制の模索が積極的に行われている。ライフエンディング・ステージは2つの意味(領域)を包含する概念であり、1) 人生の終末や死別後に備えた事前準備を行うこと(行動)、および2) ライフエンドとその後の遺族等による生活の再構築の時期(時間)と定義されている(山岡, 2012)。この定義に従うと、死生において人々をサポートする視点もまた2つに大別される。すなわち、自分自身の死に臨む人々に対するサポートと、他者の死に直面した人々(主に、遺族ないしは重要な他者)に対するサポートである。

自分自身の死に臨む人々に対するサポートには、先述したエンディングノートを含む終活やターミナルケアが該当する。一般的に、終活は自分自身の葬儀や財産相続が死後に円滑に行われることや、自分自身の人生や個人的な思いを書き遺して重要な他者に伝えることを目的に、生前の段階で個人が行うべき事柄を指し示している。なお、終活には、個人にこれまでの半生を振り返らせた上で、今後の人生における生き方を改めて模索させる、といった機能も期待されているが、いずれの目的で行われるにせよ、終活は人々が自分自身の死と肯定的に対峙するための活動といえる。

その一方で、他者の死に直面した人々に対する支援のあり方についても精力的な検討が行われ、さまざまな実践的試みが報告されている。たとえば、緩和ケア病棟における遺族会の成果(後藤, 2012; 平野, 2008; 山本, 2012)、および葬儀社によるグリーフ

ケアの成果が報告されている（廣江他，2006；廣江他，2010；坂口他，2012）。グリーフケアについては、古くは緩和ケア病棟の看護師を中心にその重要性が認知されていたが、葬儀社や宗教家（林，2004）においてもその重要性が認知され始め、現在では個々の領域における独自のグリーフケアの取り組み、あるいは領域間の協力による取り組みが活発化している。

このように、従来では死生における2種類のサポートがそれぞれ独自に展開されてきた。しかし、共感都市という概念を参考にすると、2種類のサポートを包括するサポート活動が可能であり、なおかつそれは自分自身の死に臨む人々においても他者の死に直面した人々においても有益な結果をもたらすと考えられる。その理由として、死生における共感都市の意義に関する山崎（2012）の説明が挙げられる。すなわち、「同じコミュニティに住む人々の苦境や悲しみを共感することは、コミュニティの成員全員が健康に生きるためには欠かせない倫理である。病や障害を抱える、死を迎える、死別するといった喪失にまつわる苦しみを共感することで、人はそれらを誰もが経験せざるを得ない普遍的なものであることを了解する。こうした喪失に直面しつつも人は健康でいられるという考えに基づき、共感を個人の受動的な感情の次元にとどめず、もっと包括的で環境を実際に変えていくものとしてとらえる」。つまり、同じ地域に住むさまざまな人々が受容的な雰囲気の中で死生について自由に語り合うことにより、人々は死に対する恐怖や死別に起因する悲嘆を当然のものとして受容し、なおかつ自分自身が現在置かれている環境の可変性に気づくことができる。そして、自分自身の死に臨む人々に対するサポートや他者の死に直面した人々に対するサポートの必要性を感じ取る。

以上を踏まえ、本研究は、死生における共感都市構築の観点に基づき、ライフエンディング・ステージについて包括的なサポート活動を実施し、その活動の参加者によるアンケート内容の分析から、活動の有益性および今後のあり方について考察する。包括的なサポート活動の最も重要な特徴は、さまざまな立場の人々が受容的な雰囲気の中で死生について自由に語り合うことである。そこで、本活動では、1) 参加条件を設定せずにインターネットと新聞広告を用いて参加者を広く募集した。2) 活動の第一部では、さまざまな立場の専門職者によるシンポジウムを設定し、医療・福祉従事者、研究者、宗教家、そして葬祭関係者が話題提供者として各々の経験や考えを講演した。そして、参加者達が受容的な雰囲気の中でさまざまな人達と死生について対話するこ

とを促すべく、3) 活動の第二部ではワールドカフェを実施した。

なお、ワールドカフェとは、「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた対話の手法であり、「本物のカフェのようにリラックスした雰囲気の中で、テーマに集中した対話を行うこと」（ワールド・カフェ・ネット，2014年1月10日現在）である。ワールドカフェの特徴としては次の2点が挙げられる。すなわち、①自分の意見を否定されず、尊重されるという安全な場で、相手の意見を聞き、つながりを意識しながら自分の意見を伝えることより生まれる場の一体感を味わうことができる。②メンバーの組み合わせを変えながら、4から5人単位の小グループで特定のテーマについて話し合うことにより、参加者全員が実際にさまざまな人達と対話することができる。このような対話の場を設定することにより、人と人との新たなつながりができ、「自分の意見を否定されず尊重される」という安心感の中で、日頃思っていることや心に抱え込んでしまった悲嘆を言葉として吐き出したり、自分自身の死に対する考えを率直に表現することができたりすると考えられた。

II. 研究方法

1. 包括的サポート活動の概要

本活動は、長野県松本市においてグリーフケア活動を行う市民団体の「ケア集団ハートビート」および「子どもを亡くした親の会」、そして松本地域の葬祭業者である「エーコープサプライ」によって、協働で企画・実施された。この活動は「みんくるカフェ@信州まつもと一悲嘆学スペシャル」&題され、悲しみにあたたかい地域づくりに貢献すべく、職種や立場を超え、多くの人々が悲嘆について自由に語り合い、共に学びあうことのできる場を提供することを目的に実施された。また、地域の中で死生に身近かであり、最後の別れの儀式が行われる葬祭場を会場として選び実施した。

活動は午前中の第一部と午後の第二部に大別された。第一部では、参加者がさまざまな職種の多様な考え方に触れることを目的に、グリーフケアに関わる多職種者によるシンポジウムが行われた。話題提供者として、家庭医、緩和ケア認定看護師、セレモニー専門学校講師、そして住職が登壇し、各領域におけるグリーフケア活動の現状や課題について話し合った。なお、このシンポジウムは、日本プライマリー・ケア連合学会の家庭医療専門医である孫大輔

氏の主宰する「みんくるプロデュース」の協力を受けて実施された。

第二部では、参加者同士が3つのテーマについて自由に話し合うべく、ワールドカフェが行われた。ここで設定されたテーマは、「悲しみへの寄り添いかた」、「ひとのエンディングにいかに関わるか?」、そして「終活」だった。はじめに、参加者はそれぞれこの中で最も興味のあるテーマを1つだけ選び、各々6人程度から構成される9つのグループに分かれた(3つのテーマそれぞれにつき3つのグループが構成された)。各参加者はグループのテーブルに着くと、互いに自己紹介を行った。その後、参加者は、予め企画者によって準備されたカラーフェルトペンの中で好きな色のものを手にし、グループごとに1枚配布された縦78.8cm×横109.1cmのサイズの模造紙に、自分の意見を話しつつ、それを自由に書き込んだ。なお、各グループのテーブルには1名のファシリテーターが配置された。ファシリテーターの役割は、参加者全員の対話への参加、および参加者同士のスムーズな対話の促進、そして対話の記録だった。

ワールドカフェ開始から20分後に、参加者は他に興味のあるグループのテーブルに移動し、先に対話していたグループの模造紙を参照しながら、当該テーブルでどのような対話が行われていたかをファシリテーターから説明された。その後、当該テーブルのテーマについて対話しつつ、先のグループによって意見の書き込まれた模造紙に各々の意見を書き加えた。それから20分後に、再び最初に着いたテーブルに移動し、自分達の対話が他の参加者達によってどのように発展したのかをファシリテーターから説明された後に、それを参考にしつつ再び当該テーマについて20分間の対話が行われた。

全部で3回の対話の後に、全体に向けて各テーブルのファシリテーターがそれぞれ当該テーブルで行われた対話の内容を5分程度で説明し、対話内容を参加者全員で共有した。

2. 研究方法

(1) 参加者：平成24年6月に長野県松本市において開催された「みんくるカフェ@信州まつもと一悲嘆学スペシャル」の参加者に対してアンケート調査を実施し、104名中49名から回答を得た(回答率47.1%)。したがって、本研究はこれらの49名からの回答を分析対象とした。

(2) 調査内容：A4サイズ1枚の調査用紙を作成し、「日頃考えていること」および「今回の企画に対する感想」について、自由記述形式で回答するように参加者に求めた。それぞれの質問について、A4用紙の

半分程度の大きさの枠が解答欄として呈示された。

(3) 手続き：調査用紙は、開催当日の来場者受付の際に、講演会等の資料と一緒に各参加者に手渡された。調査用紙の提出方法については、全活動の終了後に、予め会場出口に用意された箱に提出するように参加者に対して一斉に案内した。

(4) 倫理的配慮：アンケート用紙では、回答者の氏名、年齢、そして職業をはじめとするいかなる個人情報も参加者に求めなかった。また、本研究では、表1に掲載したように自由記述内容を示したが、回答の一つひとつについて、掲載の前に第三者により回答者が特定される可能性のある情報の有無を確認した。その結果、回答者が特定されると考えられる自由記述内容はなかった。さらに、これらの配慮に加えて、自由記述における類似語や同義語について文言の統一を行い、各参加者によって使用される言葉の癖によっても第三者によって特定されないように配慮した。

III. 結果

1. テキストマイニングに基づく自由記述の分類

収集されたデータに対してテキストマイニングを行い、その結果を参考にして自由記述内容の分類を行った。

テキストマイニングは、松村・三浦(2009)を参考に、TinyTextMiner(0.70 for Win)とR(2.11.1)を用いて行われた。はじめに、収集された自由記述回答のそれぞれについて形態素解析を行い、「名詞」「形容詞」「動詞」「副詞」を抽出した。同義語の異表記を統一するように処理した上で、出現頻度の累計が全出現頻度の50%程度になることを基準に、分析対象語を選出した。その結果、出現頻度が4以上の23語が分析対象語となった。なお、23語の出現頻度の累計は301であり、これは全出現頻度の49.43%だった。

23語間の関連性を解析すべく、テキスト内における単語間の同時出現頻度に基づく主成分分析を行い、ここで得られた主成分負荷量を用いてクラスター分析を行った。ユークリッド平方和を用いて単語間の類似度を算出し、Ward法を用いてクラスターを結合したところ、5つのクラスターが認められた(表1を参照)。

各クラスターがどのような内容を反映しているのかを検討すべく、自由記述の内容について検討した。各クラスターについて、構成語彙が2語以上含まれる自由記述を選出し、それらの内容から、クラスターの指し示す内容を推測した。その結果、第1クラスターは「多職種からの学び」、第2クラスターは「全体的な感想」、第3クラスターは「参加の動機およ

び今後の期待」, 第4クラスターは「新たな出会いや人とのつながり」, そして第5クラスターは「参加した意義」を反映していると推測された。したがって, テキストマイニングの結果から, 本研究において収集された自由記述は5つのタイプに大別される

ことが示された。

テキストマイニングから明らかにされた5つの特徴を基準として, 参加者の自由記述を改めて分類した。なお, この分類は, 第一著者と第二著者の協議をとおして行われた。その結果, 「多職種からの学び」

表1 クラスター分析の結果, およびそれを参考にした自由記述の分類結果

クラスター分析の結果	推測された自由記述の特徴	自由記述
1	考え 人達 医療 葬儀	多職種からの学び
2	良い 話 聴く 講演	全体的な感想
3	思う 企画 人 参加 自分	参加の動機 および今後の期待
4	立場 大切 職種 それぞれ 様々 時間	新たな出会いや 人とのつながり
5	考える 機会 多い 意見	参加した意義
		<p>1 医療に関わる人達と葬儀に関わる人達は普段はあまり接点が無いのですが, そういう人達が各専門的な知識, 経験を踏まえて, フランクに自分自身の考えを話しているのは, とても興味深かったです。</p> <p>2 様々な職種, 年齢の方々の貴重な話を聴くことができても勉強になった。</p> <p>3 様々な職種の人達が集い, 人の死と悲しみについてオープンに話す場という企画が良かったと思います。</p> <p>4 それぞれの立場の人達からの話は興味深く聴くことができました。</p> <p>5 医療, 葬儀, 宗教それぞれの専門家の人達の話聴けたことが良かった。</p> <p>6 講演は様々な職種の人達の話聴くことができても面白かったです。</p> <p>7 看護, 意志, 葬儀, 当事者・・・様々な視点で物事を見られる良い機会でした。</p> <p>8 様々な職種の人達が集って, 一つのテーマについて考える時間はとても大切なことだと思います。</p> <p>9 それぞれの職種の持つ価値や専門性についても知ることができた。</p> <p>10 それぞれの職種の人達の現状, 希望を聴く機会がとても貴重でした。住み慣れた家で家族に看取られて死ねたらどんなに幸せでしょう。家庭医がもっともっと増えて優遇される環境になれば良いと思います。</p> <p>11 午前中の先生方の話はとても良かったと思います。看護師をしているので現場でも学んでほしい内容だったと思います。ただ, 医療従事者としてはとてもすっきりできたのですが, そうでない一般の人達の意見や感想はどうでしょうか。</p> <p>12 それぞれの職種の人達が, 幅広く活動されていることに刺激を受けました。</p> <p>1 患者側からの意見(発表)が無くて残念です。</p> <p>2 講演の先生の話がとても良く, もっとたくさん聴きたかったです。</p> <p>3 今回は私も植家にしてほしい寺ばかりで, 宗教の別の面を見ました。</p> <p>4 飯島さんの話も聴きたかったです。</p> <p>5 松本地方でグリーンケアの集いがもたれたこと, とてもすばらしい企画だと思います。</p> <p>6 もっと話を聴きたかったです。</p> <p>7 お茶とお菓子をもう少し楽しみたかった。</p> <p>8 医療とか在宅とかの面からさらに視野が広がって, でも結局繋がって自分に落ちていく感じがした。</p> <p>9 対象者を限定しないというのが良かったです。</p> <p>10 ライフ・エンディングステージという言葉がありますが, これから産業として発展する可能性を秘めていると思います。</p> <p>11 参加して本当に良かったです。</p> <p>12 今回の企画, 参加できて良かったです。すばらしい会をありがとうございました。</p> <p>13 医療従事者が中心と考えていましたが, 様々な人達がいてとても良い機会となりました。</p> <p>14 もう少し若い人達が集まれるようなテーマも良いかなと思います。</p> <p>15 思っていた, 聞きたい内容があって満足しています。</p> <p>16 このような企画に参加できてとても良かったと思っています。</p> <p>17 このような機会を頂き本当にありがとうございました。</p> <p>18 とても良い話がありました。</p> <p>19 とても良かったです。</p> <p>20 大規模な企画となり, 楽しかったです。</p> <p>21 このような企画に参加させていただいて良かったです。また誘っていただきたいです。</p> <p>22 スピリチュアル的な面からの話をもう少し聴きたかったです。</p> <p>23 病気を宣告されてから, 最後を見届けるまで考える時間があり, 突然来る死は心構えができない。</p> <p>24 悲嘆学ということを身近で学ぶことができ良かったです。</p> <p>1 日ごろ寺の存在について大いに疑問を持っており, グリーンケアばかりでなく, 日常的に身近な寺を望んでいました。</p> <p>2 医療と宗教さらに葬儀の連携まで踏み込む今までにない新しい企画にとっても興味がありました。</p> <p>3 こういう取り組みがあったらぜひ参加したいです。</p> <p>4 今後さらに多くの人達に広がって, 救われる人が一人でも増えたら良いですね。</p> <p>5 これからもどんどん参加していきたいです。</p> <p>6 長野窓口があったら教えてください。</p> <p>7 今後も継続してほしい。</p> <p>8 「ピコかしたい」と私自身, 看護師として思っていたところだったので, この企画を新聞で見たととき絶対行くと思いました。</p> <p>9 次回も期待していますし, これがムーブメントとして広がっていけば良いと思います。</p> <p>10 今回限りで終わらせてしまふのは残念です。まつもとネットワーク作りをお願いしたいです。</p> <p>11 これからもこんな企画が多くあると良いと思います。</p> <p>12 また, 企画を願います。</p> <p>13 新聞でこの企画を発見したときに, すぐに参加したいと思いました。親しい人を亡くしたばかりでしたので余計に思ったのかもかもしれませんが, 自分のこれからの生き方も教えていただけるような思いで。</p> <p>14 ぜひこれからも参加したいです。</p> <p>15 大きく育っていただきたい企画だと思います。世の中に話しかけていってください。救われる人達も多いと思います。</p> <p>16 カフェ型トークもとても新鮮で参考になりました。</p> <p>17 ワールドカフェには様々な考え飛び出すので面白いですが, 人数が多すぎたこともあり, ファシリテーターの人達の準備不足が残念でした。まとめてはいけませんが, 全体像をモニタリングする必要があります。</p> <p>18 ワールドカフェは苦手です。消化不良感があり, 何を私の中に取り込めば良いのかわかりません。</p> <p>1 様々な職種の人達の経験や生の声を聴き, 午前中の講演の内容がさらに深めることができました。</p> <p>2 それぞれの立場の人達が一緒にこのような企画の中で意見を言えることは大切です。</p> <p>3 様々な職種の人達と話をできてとても充実した時間を過ごせた。</p> <p>4 年代も職種も様々な人達との交流はとても緊張したけれど, 刺激を受けたというか, 自分の未熟さを痛感するとともに, 新たな視点, 考えに触れるきっかけになったので, とても為になった。</p> <p>5 様々な職種の人達と話をすることができ, とても有意義な時間でした。</p> <p>6 医療の現場だけでなく, 様々な職種の人達と話をすることができて良かった。</p> <p>7 年代, 立場の違う人達の話が聴けて良かった。</p> <p>8 様々な立場の人達と話ができて, とても参考になりました。</p> <p>9 様々な職種, 年代を超えるコミュニケーションの大切さを体験しました。</p> <p>10 様々な人達と話ができて良かったです。</p> <p>11 様々な立場の人達と会うことができとても楽しかった。</p> <p>12 多くの人達と様々な話ができて本当に参加して良かったと思います。</p> <p>13 人と人との絆, 繋がりが薄れていく中, 様々な専門職と一般の人達が様々な繋がりを作っていくきっかけとなる企画をもっと広げたい。</p> <p>1 午前中の講演と午後のグループの話合いで自分を振り返ることができた。</p> <p>2 改めて大切なことを再認識でき, 心がリセットできたように思います。</p> <p>3 新たな気づきがあり, 有意義な時間を過ごすことができ感謝しています。</p> <p>4 これからのライフワーク, 生き方へのメッセージ, 応援, 確信を感じました。</p> <p>5 考える良い機会になった。</p> <p>6 悲嘆という誰もが経験すること, でも普段の生活の中では, 話す機会が無いとき, このような場所での言語化することができて良かったです。</p> <p>7 さらに考えが深められそうです。</p> <p>8 皆様の話を聴くことができたこととても力になりました。私自身の内にある悲嘆, これは私の内に大切にしていけない出, 良いことだけが心に残ります。主人との別れの悲しみは日が過ぎるに従い美しいものになりました。今日参加をして改めて知りました。</p> <p>9 様々な意見が聴けて良かった, 参考になった, 考えさせられることが多かった。</p>

には12件の自由記述が割り当てられ、「全体的な感想」には27件の自由記述が、「参加の動機および今後の期待」には15件の自由記述が、「新たな出会いや人とのつながり」には13件の自由記述が、そして「参加した意義」には9件の自由記述が割り当てられた(表1)。

2. 自由記述内容の傾向

ここでは、テキストマイニングを手がかりにした自由記述の分類結果に基づき、参加者による自由記述内容の特徴について検討する。

「多職種からの学び」のクラスター(第1クラスター)は、参加者に多角的な考え方に触れてもらうべく、複数の立場の専門職者による講演を意図的に設定した点を評価する自由記述内容から構成されていた。いずれの自由記述内容も、多職種の人達が一同に会したことに對して「勉強になった」、「興味深く聴くことができた」、「様々な視点で物事を見られる良い機会だった」、「それぞれの職種の人達が、幅広く活動されていることに刺激を受けました」など、肯定的に評価する内容だった。

「全体的な感想」のクラスター(第2クラスター)では、「とても良かったです」や「参加して良かったです」をはじめ、本活動に対する肯定的な評価が見受けられた。また、「患者側からの意見(発表)が無くて残念です」や「飯島さん(住職)の話も聴きたかった」という意見には、やはりさまざまな立場の人達の考えに触れたいという参加者の意欲が推察された。その一方で、ワールドカフェに対する否定的な評価もあった。具体的には、「ワールドカフェは苦手です。消化不良感があり、何を私の中に取り込めば良いのかわかりません」だった。さらに、「ワールドカフェには様々な考えが飛び出すので面白いですが、人数が多すぎたこともあり、ファシリテーターの人達の準備不足が残念でした」という意見も見受けられた。

「参加の動機および今後の期待」のクラスター(第3クラスター)では、「今後もこのような企画を続けてもらいたい」という期待が18例と全体の感想について数多く見受けられた。また、本活動に参加する上での動機について言及したものもあった。たとえば、グリーフの問題について医療従事者として「どうにかしたい」と日常的に思っていた、という動機や、医療・宗教・葬儀にまで踏み込んだ新たな企画への関心などが動機として挙げられた。さらに、「親しい人を亡くしたばかりで、この企画を新聞で見つけてすぐに参加したいと思いました。自分のこれからの生き方も教えていただけるような思いました」という記述も見受けられた。

「新たな出会いや人とのつながり」のクラスター(第4クラスター)の自由記述は、自分自身が直接的に他の参加者達と話をできた点を評価する内容だった。これも、第1クラスター同様に、本活動が重視したことであり、いずれの記述内容も肯定的な内容だった。年代も職種も立場も違う様々な人と出会い、その人達から話を聴くことができることにより「自分の未熟さを痛感するとともに、新たな視点、考えに触れるきっかけになった」など、自分も含めて他のさまざまな立場の参加者達とオープンに對話できたことが、新たな考え方を得る良い機会になったと評価された。

最後に、「参加した意義」のクラスター(第5クラスター)でも、すべての自由記述において本活動に対する肯定的な意見が記されていた。たとえば、「本活動への参加によって新たな気づきを得た」、「自分自身を振り返る機会になった」、そして「グリーフを言語化することで自分自身のグリーフに向き合う機会になった」という内容が見受けられた。

IV. 考察

本研究の目的は、従来別々に行われてきた、自分自身の死に臨む人々に対するサポートと、他者の死に直面した人々に対するサポートを統合する包括的なライフエンディング・サポート活動の有益性と今後のあり方について検討することだった。以下では、本活動の有益性について考察した上で、死生における共感都市の構築という観点を踏まえて今後のライフエンディング・サポートの活動のあり方について考察したい。

1. 包括的なライフエンディング・サポートの有益性

本活動は、共感都市の概念に基づき、遺族だけを集めて行う従来型のサポート活動でなく、遺族も含むさまざまな立場の人々が一堂に会して對話することによって、参加者達が各々に必要な気づきを得て、なおかつ現在の環境の可変性に気づくのではないかと考えて実施された。

本活動は、参加者がさまざまな立場の人々と對話できることを最も念頭に置き、第一部ではさまざまな職種の人達を話題提供者として設定し、第二部ではワールドカフェを設定した。これは包括的なライフエンディング・サポートの根幹であるが、本活動は十分に意図した活動を展開できたと評価できる。その理由として、第1クラスターの「多職種からの学び」と第4クラスターの「新たな出会いや人とのつながり」に分類された自由記述内容が挙げられる。これらの2つのクラスターには全部で25件の自由記述が分類されたが、その内の23件(92%)が「さ

さまざまな立場（職種）の人達からの話を聴けたこと」もしくは「さまざまな立場の人達と対話できたこと」を肯定的に評価する内容だった。この結果から、包括的ライフエンディング・サポートの基本的な活動形態として、さまざまな職種の人達を話題提供者とした講演とワールドカフェの組み合わせは妥当だったと考えられる。

それでは、参加者達は本活動から何を得たのだろうか。本活動では、さまざまな立場の人達との対話をとおして、参加者達が各々に必要な気づきを得て、なおかつ現在の環境の可変性に気づくのではないかと、という発想で実施された。これについて、「様々な視点で物事を見られる良い機会だった」、「新たな視点、考えに触れるきっかけになった」、「さらに考えが深められそうです」、そして「参考になった。考えさせられることが多かった」と評価した自由記述内容から、個々の参加者が日ごろから行っていた何らかの自問や思索について何らかの示唆（気づき）を得たのではないかと推測される。すなわち、「参加者が各々に必要な気づきを得る」という本活動の1つ目の目的が達成されたと考えられる。また、「自分を振り返ることができた」、「大切なことを再認識でき、心がリセットできた」、そして「これからのライフワーク、生き方へのメッセージ、応援、確信を感じた」という自由記述内容からは、本活動が参加者のこれからの生き方の動機づけになったことが示唆される。したがって、「現在の環境の可変性に気づく」という本活動の2つ目の目的も達成されたと考えられる。

もちろん、自由記述内容の多くは、漠然と「～が良かった」や「～が興味深かった」という簡単な文面だったことから、参加者の大半において上述した2つの目的が達成されたと結論づけることはできず、少数の参加者においてのみ目的が達成されたのではないかと、という疑問は依然として残されている。この疑問について本活動結果からは正確な答えを提供することはできず、これに応えるべくアンケート調査の収集方法の改善が今後の課題である。

2. 死生における共感都市の構築に向けて

人が住み慣れた地域の中で幸せに最後を全うし、その後残された者達もその地域の中で幸せに暮らし続けられるためには、地域におけるケアの力が問われる。その中には、もちろん医療的なケア、介護・福祉的なケア、ボランティア、宗教者からの支援が不可欠であり、実際にこれまでにそれぞれが一定の成果を挙げた。しかし、個々の専門家が個々の立場からのみ活動を行うのではなく、本活動が提案した包括的なライフエンディング・サポートの中で、

専門職者として互いに力量を発揮するケアのあり方が今後の社会で重要であり、そのような活動の蓄積が、ひいては山崎（2012）がいう「共感都市」の構築に繋がっていく。すなわち、人の死や死別の経験に地域社会が正面から取り組むことを中心的理念に据えて、それを具体化させていくコミュニティづくりの実現に寄与する。

山崎（2012）が引用している Kellehear によれば、「共感都市」を具体化したコミュニティには次の9つの特徴がある。すなわち、1) 共感健康にとって欠かせない倫理の一つであるとの考えを踏まえた地域の健康政策を持つ、2) 高齢者、致命的な病に生きる者、喪失を抱えて生きる者が持つニーズに応じる、3) 社会的文化的な違いに対して非常に寛容かつ前向きであること、4) 自治体の政策立案に際し地域の緩和ケアや死別ケアに携わる諸団体や市民を巻き込む、5) 多様な支援に関する経験、かわり、交流の機会があることを地域住民に広報する、6) マイノリティに対する配慮をもち、地域にとって重要な彼らの喪失の歴史を記憶し記念することを推進する、7) 緩和ケアや死別ケアを容易に利用できる、8) 経済的に不利な立場にある人々の存在を無視せず、彼らを支援するプランがある、そして9) 地域コミュニティがもつスピリチュアルな伝統を保護し振興する。

本活動の継続は、この9つの中の2) ニーズに応じる、3) 寛容かつ前向きであること、4) 諸団体、市民を巻き込む、5) 地域住民への広報、そして7) 容易に利用できる、といった5つの特徴について少なからず貢献すると思われる。2) のニーズに応じるについては、自由記述の分類結果における「参加の動機および今後の期待」からも明らかである。この中には、死別体験していると思われる参加者による記述もあり、本活動が彼らのニーズにも応えることができたと推測される。すなわち、「悲嘆という誰もが体験することであるにもかかわらず普段の生活の中では話す機会が無いときに、このような場所で考えを言語化することができた」、「自分のこれからの生き方を教えてもらえるような思いで参加した」という記述内容に基づくと、グリーフを抱えている人達にとっても充分ニーズを満たしうる活動だったことが分かる。また、他の参加者からも「今後さらに多くの人たちに広がって、救われる人がひとりでも増えたらいいですね」、「世の中に話しかけて行ってください。救われる人達も多いと思います」など、本活動に対する今後の期待の声も聞かれた。参加者によるこれらの感想については、市民団体と地域企業の協働によって企画・開催され、新聞広告とインターネットを用いて対象者を限定せずに参加

者の募集を行い、そしてあらゆる意見の主張も許される受容的・寛容な雰囲気の世界カフェの中で、死や死別の経験に正面から取り組んだことが大きな役割を果たしたと推察される。これらに加えて、本活動が死別ケアの儀式を行う葬祭場で行われたことも大きいと思われる。

最後に、松本市（2014年1月10日現在）においては健康寿命延伸都市として「市民一人ひとりの健康寿命を延ばし、ひいては、松本のまち全体の身体的、精神的、社会的な健康水準を高めます」と標榜しており、政策として健康を取りあげている。健康とは、身体的な健康のみならず、精神的、社会的健康も含めて求められることから、喪失を抱えて生きる者達の精神的社会的健康も視野に入れて欲しいと願う。本活動をさらに継続し進めていくことによって、より充実した健康寿命延伸都市としての地域づくりに貢献すべく、私たちが働きかけていくことを課題として活動を続けていきたい。

引用文献

- 後藤直美（2012）：遺族会によるグリーフケアを考
える，死の臨床，35（2），p. 347.
- 林弘幹（2004）：グリーフケア—真宗からのアプ
ローチ—，宗教研究，77（4），pp. 430-431.
- 平野美香（2008）：当院における遺族会を通しての
グリーフケアについて，死の臨床，31（2），p.
257.
- 廣江輝夫，泉原久美，他（2006）：葬儀社によるグリー
フケアの試み（2）—「ひだまりの会」の取り
組み—，死の臨床，29（2），p. 221.
- 廣江輝夫，泉原久美，他（2010）：葬儀社によるグリー
フケアの試み（7）—NPO法人「遺族支え愛ネッ
ト」の設立と協働—，死の臨床，33（2），p.
349.
- 松本市（2014年1月10日現在）：「健康寿命延伸都市・
松本」創造プログラム，http://www.citymatsumoto.nagano.jp/kenko/kenkojumyo/ken_project/index.html.
- 松村真宏，三浦麻子（2009）：人文・社会科学のた
めのテキストマイニング，誠信書房，東京.
- 坂口幸弘，泉原久美，他（2012）：ワーク形式によ
る遺族ケアの試み—あなたとつくる葉っぱの物
語—，死の臨床，35（2），p. 346.
- ワールド・カフェ・ネット（2014年1月10日現在）：
ワールドカフェとは？，<http://world-cafenet/about-wc.html>.
- 山本朝美（2012）：遺族会における今後の課題，死
の臨床，35（2），p. 346.
- 山岡寛（2012）：新しい環境下における経済産業省

のライフエンド周辺領域での対応について安心
と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」
創出に向けて，司法書士，488（10），pp. 2-7.
山崎浩司（2012）：死生を支えるコミュニティの開発，
老年精神医学雑誌，23（10），pp. 1194-1200.